

公表

事業所における放課後デイ自己評価総括表

○事業所名	チャイルドサポートみやこ		
○保護者評価実施期間	令和8年 2月 1日		～ 令和8年 3月 1日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	10	(回答者数) 10
○従業者評価実施期間	令和8年 2月 1日		～ 令和8年 3月 1日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	12	(回答者数) 12
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 4月 1日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・重度身体障害児の通所施設ということで、様々な専門職が集まっている事業所なので、多方面での支援が提供できる。支援の内容について専門職からアドバイスをもらい、支援計画に反映する事で、支援の深堀りと支援の質向上に繋がる。	・専門職が多く連携が重要なことを踏まえ、専門職の意見に偏りが生じないよう意見をすり合わせる時間を確保している。また、児童のライフステージを踏まえた課題を共有することで、専門毎に建設的な意見の交換が出来ている。	・各専門職の勉強会を行う事で、職員のスキル向上と支援の根拠を学ぶことができる。
2	・長期休暇時は他障害福祉事業所と交流を行っている。重度身体障害児を快く受け入れてくれる体制が整っているため、様々な児童と交流ができ、社会性が育つ。	・日時と担当職員を事前に決めることで、交流の実施まで担当職員が責任をもって交流に参加する事ができている。日程の変更等あれば担当以外の職員にも全体周知することで、失念防止となる。	・交流は実行できているがその後の振り返りMTGが実施できていないため、振り返りを定期的に行うことで、課題の抽出や他事業所からの学びを得る事でより良い交流や活動の提供に繋げる
3	・利用児童の家庭の状況に応じて、臨機応変な預かりの対応や病院の受診同行をすることで、きょうだいの時間確保や養育者のレスパイトに繋がっている。体調面についてご家族がうまく説明出来ない時の受診同行は専門的な視点で医者に補足説明を入れ家族支援を行っている	・相談員や訪問療育等関係機関と密に連携することで、家族の状況把握や困り感の抽出に繋がり、個別対応等、家族に寄り添った家族支援に繋がっている	・事業所では緊張して中々話せないご家族もいるので、自宅訪問等を行い、ご家族が安心して相談、話ができるように工夫していく。事業所職員だけでは難しいご家族へは、訪問サービス事業所の協力体制や相談員の協力も貰いながら、関係機関全体で連携していく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・全相的にリスクマネジメント力が弱い。医療事故が起こるリスクの高い児童の見守りが手薄であったり、似た様な案件の事故が数ヶ月後に上がり、再発防止ができていない	・職員同士が集まってケアの相談が始まる事で、見守りが手薄な児童が出てくる。 ・日々のヒヤリに気付いていない、または気付いても何も起きていない事で見過ごされている。 ・事故、ヒヤリの対策を講じた後の評価の話合いがないことが、対策の評価に繋がらず不明なまま進んでいる。	・事故やヒヤリに対して講じた対策についての評価MTGの実施 ・定期的なKYTを行うことで、事業所内のヒヤリや事故の要因に気付く機会を作る。 ・現場の指示を出す職員を決める事で、児童の見守りの徹底、事故、ヒヤリ防止
2	・加算に繋がるサービスの計画書の定期的な内容の見直し、訂正が不十分	・子育て世代の職員が多く、職員の子どもの体調不良等で休みが増えると内容の確認、見直しの話合いが難しい ・見直しを行う日程を組んでいないので、実施できていない	・計画的に計画書の見直しの時間を確保し、見直しMTGを行う ・計画書を全員が確認できるよう、計画書の保管場所の工夫、全体周知を行う
3	・児童の成長に伴い、自宅で入浴を行うことが難しいことから今後の事業所利用目的は入浴サービスと医療ケアに比重が大きくなり療育支援や個別支援が低頻度となっていく	・入浴とケアで降所される日が続くことで、経験値が下がることや、子ども達のやりたい活動の実施、地域交流の機会が減る	・保護者面談時に、入浴と療育支援の希望内容を確認、また、放課後デイサービスの役割をお伝えする。 ・居宅介護や訪問介護等の協力を得る事で、事業所で活動する時間を増やす事に繋げる